

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・より居心地の良い居場所となるために、ボランティアの活用を検討する。 ・より多くの人々が拠点を利用するような取り組みの検討をする。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		B	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

H29年度からR3年度利用者数・登録者数推移										
	利用者数		利用者内訳		新規登録者内訳					
	年間利用者数	一日平均利用者数	0歳児利用数(①)	父親利用者数(%) (②)	年間新規登録者数	0歳児登録数(%) (③)	妊娠期登録者数(④)	プレパパ	プレママ	
H29年	18,990人	78人/日	3,069人	406人(5.6%)	764人	447人(1.8%)	54人	11人	43人	
H30年	18,866人	78人/日	3,134人	651人(7.1%)	838人	503人(2.1%)	79人	21人	58人	
H31年	16,748人	70人/日	2,444人	523人(6.9%)	730人	446人(1.9%)	96人	35人	61人	
R2年度	9,893人	40.9人/日	1,556人	426人(8.8%)	463人	284人(1.9%)	48人	21人	27人	(3か月間休館)
R3年度	11,087人	46.2人/日	909人	466人(8.7%)	579人	358人(1.5%)	59人	26人	33人	(人数制限有)

*R2年度以降はコロナ禍のため人数制限有(R2年度は3か月間休館)

1 <<利用者を温かく迎え入れる雰囲気づくり>>

- ・親子とのやり取りの中から、共通項を把握し、他の親子と知り合うきっかけを作る工夫をした。孤立している親子には声を掛け、安心して過ごせるよう配慮した。特に手助けを必要とする方には手厚くサポートした。
- ・1F「ひだまり」(*1)では、居場所の開館時間外にもオムツ替えや授乳での利用ができるようにし、周知をした。
- ・地域のイベントや区の4か月健診、両親教室、子育てサロン、公園あそび等にスタッフが向向き拠点の周知をした。
- ・泉区福祉保健センター内に、乳幼児健診等で訪れる養育者の目にふれるよう、拠点の様子がわかる写真を多用したポスター大の案内を掲示した。
- ・妊娠期に家族で参加できる事業を開催し、出産後早期の母親の来館、父親の来館につながった。(データ①②③④)
- ・妊娠期の事業参加者へ出産後参加できる事業を案内した(ベビーマッサージ体験、赤ちゃんタイム(*2)、親子で一緒に楽しみタイム(*3))
- ・生後12カ月までに来館した方に、すきっぷサポーター(*4)が製作した「背守り(*5)」を贈った。誕生を祝うメッセージカードを同封し、養育者が返信するという間接的な交流が出来た。
- ・コロナ禍となり、消毒ができる玩具や遊具に替え、密にならないよう配置にも配慮した。また、利用者自身も消毒がしやすいよう、消毒キットを数か所配置したり、手洗い場を非接触型の水栓にしたりするなど、安心して利用できるよう配慮した。
- ・人の少ない場所で離乳食を食べさせられるよう、テーブルのついた離乳食用の椅子を準備し、居場所(2F)が混雑している際には、1Fのスペースを使えるよう配慮した。
- ・子どもの月齢や成長に応じ参加できる事業を案内し、継続利用や参加者同士のつながりが出来るよう働きかけた。

2 <<多様な養育者と子どもが訪れる場>>

- ・子どもが就園し、拠点の利用が減った親子が参加できる会を開催した(H31年度 48組 100名参加)。また、参加した養育者をすきっぷサポーター(*4)や横浜子育てサポートシステムの活動につなげた。
- ・スタッフは共遊ひろば(*6)から居場所の利用につながった親子に丁寧な声掛けをし、安心して過ごせるようにした。
- ・母親との会話からレスパイトのニーズを捉え、父親と子どもだけの利用を促し、土曜日の家族利用や父子の継続利用により、父親の利用が増えた。(データ②)父親の利用が増えたため、父親が参加する事業を毎月開催し、乳児期の遊びや外遊び、子どもの発達への学び、育児復帰後の生活に向けた講座など、父親の関心が高い内容とした。
- ・コロナ禍にニーズの高い公園遊びを開催し、通常の居場所利用者より幅広い年齢層の子どもが参加が見られた。
- ・ひとり親家庭の方へは、その方の希望を汲みながら、居心地の良い場となるよう心掛けた。
- ・外国につながる方の利用に備え、英語・ベトナム語のリーフレットを作成し案内した。また、外国につながる利用者の協力を得て、最低限必要な利用案内を韓国語・中国語で作成した。トイレの使用案内には英語や中国語を標記し、掲示した。
- ・「やさしいほんご」版のリーフレットの整備も必要と捉えている。
- ・国際結婚をした方のニーズを捉え、おしゃべり会を実施した。
- ・祖父母と孫の利用が可能であることを周知し、利用の際、他の養育者との交流に繋げ、必要に応じて手を貸し、過ごしやすくなるよう配慮した。
- ・小学校入学を控え、拠点を卒業する親子が遊び交流する会(4月から1年生になるお友だちすきっぷであそぼう)を開催し、養育者子育てサポートシステムの預かり手としての活動に繋がった。
- ・季節、行事等の壁面装飾を親子とスタッフで作成する機会を設けることで、養育者がボランティアに居場所づくりに参加している意識づけにもつながった。また、製作の様子や完成した装飾をInstagramで発信することで、家庭での会話にもつながった。

3 《ニーズの把握の場》

- ・ 養育者との会話や相談からニーズを捉え、共通する課題を持つ人が集える事業を行った。
 (「0歳・1歳・2歳生まれ」「アラフォーママの会」「出身地別の会(*7)」「赤ちゃんタイム」等)
- ・ シングルの方に向けた事業を「ひとり親サポートよこはま」と共催し、託児をつけ、土曜日に拠点とは別の場所で開催した。
- ・ 発達を促すような関わりを持ちたいという親子に対して、スタッフが子どもの年齢や発達に応じた遊び方やおもちゃの使い方を提案した。
- ・ コロナ禍で外出しづらいが、家での遊びに行き詰っているという声を聞き、SNSを通して、スタッフの手遊び動画を配信した。また、自宅でおもちゃをつくれるようにわかりやすく解説した作り方のコツを画像として作成し、発信した。
- ・ 自宅からオンラインで参加できる事業を開催した。(「1歳あつまれ」「出身地別の会」) 開催前にはオンラインが苦手な方も参加できるように、練習する機会を設けるなど、丁寧に対応した。
- ・ 感染状況が逼迫し、「赤ちゃん教室」が行われなかった時期に0歳児の養育者が出かける場が無いという声を聞き、1歳未満の子どもと養育者を対象とした「赤ちゃんタイム」を開催し、毎回満員に近い参加者があった。
 (「赤ちゃん教室」再開後は、回数を減らして継続実施している)
- ・ 二人目以降の妊婦が、友達づくりや悩みを話す機会が欲しいという声を聞き、事業を実施したことで居場所での継続した交流に繋がった。(親子で一緒にリフレッシュタイム)

4 《交流の中で育ち合う場》

- ・ 共通する課題をテーマとした事業に参加した利用者同士が、交流する場として継続したいというニーズを受け、利用者による主体的な会の開催となるようサポートした。
- ・ 事業に参加した養育者のニーズを聴き取り、親子サークルを立ち上げるための協力をした。
- ・ 講座や共通する課題の事業終了後、養育者同士が交流する姿が見られ、ピアカウンセリングの場となった。
- ・ 妊娠期向け事業の参加者と拠点利用者の交流で先輩ママ・パパが体験談や産後の生活の話をする姿が見られた。妊娠期に事業に参加した方は自分も話をしたいと妊娠期の来館者と交流し、経験を伝える場となった。
- ・ 仕事復帰をする家庭に向けて、復帰後の生活を考える講座をオンラインで開催した。その際、実際に復帰をしたパートナーを持つ先輩パパに、復帰後の体験談を話してもらい、参加者との活発なやりとりが行われた。その後、居場所で実際に会おう場面もあり、交流が生まれた。

(*1)ひだまり: 1Fベビーカー置き場の奥の、靴を脱いで利用するスペース

(*2)赤ちゃんタイム: コロナ禍で赤ちゃん教室がお休みになり、0歳児を連れて行く場所がないという養育者の声から、0歳児の親子が参加し、養育者の友達作りや子どもとのふれあい方を知るきっかけを作るイベントの事。初めて拠点に来館するきっかけにもなっている。

(*3)親子で一緒に楽しみタイム: 妊娠期の家族が参加するイベントの時に来館し、先輩パパ、ママとしてマタニティさんたちに体験談をお話してくれる方が参加できるイベント。

(*4)すきっぷサポーター: 手作り、読み聞かせなど希望に応じて活動するボランティア

(*5)背守り: 子どもの健康や成長を願う模様を着物の背の縫い目に刺繍したもの

(*6)共遊ひろば: 発達がゆっくりな子ども、小さく生まれた子ども等を対象とした事業で、拠点とは別の会場を借りて行っている。(利用者支援事業に詳しく掲載)

(*7)出身地別の会: コロナ禍でなかなかご実家に帰省できない方が多い中、出身地別に集まり、地元のいいところを話したり、地域の言葉で話をしたり交流をするイベント

評価の理由(区)

- 1 区役所担当者が地域子育て支援拠点に出向いた際、利用者を温かく迎え入れる雰囲気・状況となっているか、拠点の様子を利用者目線で確認した。また、第三者委員へも相談等ないことを確認している。
- 2 母子手帳交付時に地域子育て支援拠点に関する情報提供をし、妊娠期から利用できる場であることを周知した。
- 3 妊婦及びパートナーの拠点利用のきっかけとなるように、両親教室参加者に対し子育て支援拠点の職員と協働で両親教室内での周知は必ず実施している。
- 4 拠点が開催したひとり親家庭へ向けた講座に関しては区役所が窓口等でチラシを配布・配架し、未熟児・障害児等の講座に対しては該当する家庭には地区担当保健師から直接配布するなど講座の企画、周知についても協議した。また、こんにちは赤ちゃん訪問対象者や転入者に対して拠点の案内(泉区子育てガイド:ちよこっマップ、通信等)を配布している。
- 5 利用促進につながるよう区庁舎内で子育て支援拠点に関する掲示物を展示し、毎月発行の通信やイベントチラシを配布している。
- 6 利用者のニーズや傾向を把握するため拠点が実施している利用者アンケートの結果を共有している。また、区では子育て家庭の声を把握するため、乳幼児健診の対象者に子育てアンケートを実施した。その結果をもとに親子の居場所が重要であると共有した。
- 7 拠点スタッフが様々な親や子どもの対応が出来るように情報共有をしている。養育支援が必要な家庭に対しても、区と情報を共有しながら広場での見守りを依頼している。区が把握している地域のニーズを拠点と共有し、居場所を活用した事業実施に向け働きかけた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ 居場所でのボランティアを短い時間でも希望に沿い、得意なことを活かして参加する形で受け入れた。また、直接親子と接する機会が持てなくても、メッセージカードを介して交流したり、製作したものを子どもに贈ったりして、温かい雰囲気づくりをすることが出来た。
- ・ 妊娠期の方とその家族を対象とした事業を土曜日に開催し、妊娠期の方の来所が増えた。その際、出産後に親子で参加できる事業を案内し、産後の継続した利用に繋がった。また、スタッフが区の両親教室を見学し、区の方向性とすり合わせをした上で、妊娠期の家族向け事業を組み立てた。
- ・ 緊急事態宣言発令に伴う休館期間中には養育者の声を聞く必要を感じ、Webアンケートで家での過ごし方に苦慮している様子を捉えたことで、スタッフによる遊びの動画やおもちゃの作り方を配信した。
- ・ コロナ禍で拠点を利用しにくい方に向けて、オンラインを利用した講座、イベント、個別相談等を多数開催した。
- ・ 足を運びにくい方のために、居場所の様子やイベントの様子をタイムリーにInstagramで発信し、雰囲気が伝わるように心掛けた。
- ・ 0歳児対象の事業は初めて利用する方が来館するきっかけになっている。同じ年齢の子がいる安心感から、継続利用につながっている。
- ・ 情勢に合わせて安心、安全に来ていただける工夫をタイムリーに発信している。

(課題)

- ・ 居心地の良い場とするために、丁寧な傾聴を心掛け、また把握したニーズを拠点事業に取り入れていく。
- ・ 利用の少ない外国籍の方や就労している方、妊娠期の方へのアプローチを区と共に検討していく。
- ・ スタッフは地域の資源の場を見学し、情報をスタッフ間で共有していく。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区こども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・多様化する困り感・相談に対応するため、研修やスーパーバイズを受けながら、さらにスタッフのスキルアップを図っていく。また、スタッフの入れ替わりの際にも、拠点全体の相談対応のスキルを維持していく。 ・日々の利用者とのやりとりや専門家相談から見える相談傾向の中からニーズを探り、それに応える事業を行っていく。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ) H30年度~R4年度(4月~7月)

年度	ひろば相談			オンライン 電話・個別 (データ①)	
	実施回数	参加人数	平均	実施回数	参加人数
H30	15回	103人	6.9人	—	—
H31	10回	75人	7.5人	—	—
R2	12回	118人	9.8人	3回	電話 2人 個別 10人
R3	12回	146人	12.0人	6回	Zoom 2人
R4	4回	36人	9.0人	4回	電話 2人

年度	ひろば相談	
	実施回数	個別相談
H30	9回	32人
H31	19回	48人
R2	4回	48人
R3	7回	84人
R4	3回	32人

年度	ひろば相談			オンライン 電話・個別 (データ①)	
	実施回数	参加人数	平均	実施回数	参加人数
H30	12回	112人	9.3人	—	—
H31	10回	83人	8.3人	—	—
R2	9回	118人	13.1人	3回	ひろば 5人 個別 6人
R3	11回	134人	12.1人	7回	電話 4人
R4	3回	32人	11.3人	3回	Zoom 4人

年度	ひろば相談	
	実施回数	個別相談
H30	2回	24人
H31	2回	40人
R2	—	—
R3	2回	20人
R4	1回	10人

《ひろば・個別相談に対応したイベントや講座》

【生活について】

- ・ 助産師講座(wellness育児をめざして、入園に向けて)
 《参加者数: H30年度 22人、H31年度 7人、R2年度 20人(オンライン2回)、R3年度 28人(オンライン3回)》
- ・ 離乳食講座(出張講座含む)
 《参加者数: H30年度 27人、H31年度 26人、R2年度 9人、R3年度 12人、R4年度 10人》
- ・ 保育園の先生がいる日
 《参加者数: H30年度 192人、H31年度 232人、R2年度 126人、R3年度 248人、R4年度 248人》
- ・ 出張講座
 《参加者数: H30年度(リトミック)20人、H31年度(リトミック)20人、R2年度(リトミック)10人、R2年度(乳幼児の排泄)8人》
- ・ イヤイヤ期の講演会
 《参加者数: H30年度 63人(うち父親15人)、H31年度 14人(うち父親5人、託児9人)》
- ・ 食の講座
 《参加者数: H30年度 36人、H31年度 31人》
- ・ 3歳児子育て教室(区と協働)
 《参加者数: H30年度 13人(託児9人)》
- ・ 就職応援講座セミナー
 《参加者数: H30年度 34人、H31年度 20人、R2年度 9人、R3年度 10人(オンライン)》
- ・ 乳幼児の眠りのおはなし
 《参加者数: R4年度 21人(オンライン、うち父親5人)》
- ・ パパ講座
 《R3年度 復職後の生活について(オンライン): 5家族、先輩パパ2人》
 《R4年度 子どもの発達のおはなし: 6人 発達を踏まえた父と子の遊びについて: 12人》

【ピアカウンセリング】

- ・ アラフォーママの会、同じ出身地の会、2歳以上あつまれ、0歳児、1歳児の会、コロナで変わった家族の生活、国際結婚した人の会、年子のママの会、等(データ②)

《スタッフ研修》

- ・ イヤイヤ期の子どもとその親への支援、乳幼児健診について(区の保健師による)、幼児安全法、沐浴指導(区の助産師による)、幼児教育・保育無償化について、個人情報保護、相談対応ノ傾聴について、定期的な心理士との勉強会

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

1 《安心して相談できる場》

- ・子どもとのやり取り(あそびやふれあい、声掛け)の中から信頼関係を築き、気軽に相談(話)が出来る雰囲気作りを心がけた。
- ・養育者との会話で、悩みや疑問が出てきた時は、了解を得た上で、居場所にいる少し先輩の母親・父親に体験談を聞くなど、居場所の中で交流しながら解決の糸口が見つかるような働きかけをした。また、より詳しい情報を提供するために、より詳しいスタッフと連携し情報を提供した。
- ・丁寧に傾聴し、気持ちを受け止め、相談内容によって必要な情報を提供した。また、了解を得た上で他のスタッフにも相談し、拠点以外の機関や支援者に繋がる必要があると考えられる場合には横浜子育てパートナーに繋げた。
- ・希望に合わせて、じっくり話をしたい方は横浜子育てパートナーへつなぎ、専門機関の情報を提供した。
- ・コロナ禍で生活に変化があった方たちの気持ちを吐き出す場を設けた。
- ・2017年より、区内の公立保育園と連携し、毎月遊びの提供を受けながら保育士へ気軽に相談できる機会を設けたり、育ちについて学ぶ場を設けたりした。(オムツはずしのお話、親子で身体を動かすリミック等)
- ・子ども同士の関わりの中で生じる様々な出来事に対して、スタッフが子どもの育ちを考慮した言葉かけをし、養育者の気づきとなるような働きかけをした。(再掲 居場所4)
- ・スタッフは、より良い対応を行うために様々な研修に参加したり、臨床心理士によるスーパーバイズを受けたりし、継続的な学びを積み重ねた。
- ・相談の傾向を振り返り、養育者に必要な情報を手に取りやすい形で配置し、案内した。
- ・日々の振り返りの際に、必要に応じて横浜子育てパートナーや子育てサポートシステムのスタッフとも相談内容について共有し、対応を考え、その後の支援に生かすようにしている。
- ・転入してきた方や親子で行ける場所を知りたい方に対し、「ちよこつとマップ」や地域のチラシを地図を見ながら、行きやすい施設・イベント・親子サークル・公園遊び等を一緒に探し、案内した。
- ・様々な地域資源を具体的に案内できるようにスタッフは地域の支援の場を訪問する機会を増やし、より利用してもらえよう、養育者へ具体的な情報提供ができるようにした。

2 《利用者の個別相談から見えてきたニーズを事業につなげる》

- ・居場所で行う専門家相談の後に、専門家と振り返りを行い、相談の傾向や全体的な課題を把握して事業を組み立てた。(wellness育児をめざして、入園に向けて心がけること、出張離乳食講座、保育園の先生が来る日)
- ・希望に合わせてじっくり相談をしたい方については、横浜子育てパートナーへつないだり、専門機関の情報を提供したりした。
- ・利用者とのやり取りや相談の内容からニーズをとらえ、関係機関とも連携しながら柔軟にイベントや講座を開催していくことが出来た。(出張離乳食講座、食の講座、アラフォーママの会、同じ出身地の会、イヤイヤ期の対応、乳幼児の眠りのおはなし、パパ講座、はじめてのZoom体験してみよう 等)
- ・コロナ禍で外出し辛いという声を受け、自宅からオンラインで専門家相談が出来るよう環境を整えた。オンラインが苦手な方に向けて、参加前に練習の場を設けてフォローした。(データ①)
- ・日ごろ親子で過ごす居場所で相談できる機会や、共通項を持つ他の利用者と話が出来る場を設けた(データ②)。
- ・利用者の居住地域の保育園の地域支援、子育てサロン、子育て支援者会場、親子サークルなどを案内し、地域の中で子育てができるように案内した。

評価の理由(区)

- 1 相談対応において重要である個人情報保護に関する研修を実施した。
- 2 地域子育て支援拠点スタッフの相談スキル向上を目標に、横浜市の新たな取組や制度に関する情報共有を行った。
- 3 地域子育て支援拠点からの報告を受け、福祉保健センター各課での対応を協議し、関係者や関係機関への引継ぎを行っている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・相談内容は多様化してきているため、スタッフが研修に参加したり、居場所では養育者向けに専門家相談をとりいれながら、気軽に相談できる場を作ることができた。
- ・子どもの成長に合わせて、その時々々の悩みやニーズに対応することを意識しながら相談に答えた。
- ・既存の事業を継続して行っていくことも大切にしてきた。地域の支援の場に専門家を派遣して、拠点から遠い地域での相談事業を実施し、相談機会を増やしてきた。また、地域の支援の場と共に見守る繋がりも出来てきている。
- ・区の両親教室や乳幼児健診へ見学に行き、事業に生かすことができた。
- ・スタッフは地域の資源の場へ行き、理解を深め、スキルアップに努めることが出来た。
- ・コロナ禍で拠点に来ることが難しい方に向け、オンライン相談や講座を開催した。また、土曜日にも開催することで、夫婦で参加できる機会となった。

(課題)

- ・スタッフは居場所の中での相談に対してより良い対応ができるよう、地域資源を十分に知り、地域の支援についての理解をスタッフ全体で深め共有していく。
- ・横浜子育てパートナーや、専門家につなげた後のフォローやフィードバックを区と共有できるよう意識する。
- ・スタッフは様々な研修に参加し、その内容をスタッフ間で共有することでスキルアップできるように努めていく。
- ・妊娠期の家庭に向けて、参加できる講座等を区と協力して周知に努めていく。

振り返りの視点

- ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。
- ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。
- エ 区子ども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。
- オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区子ども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。
- カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

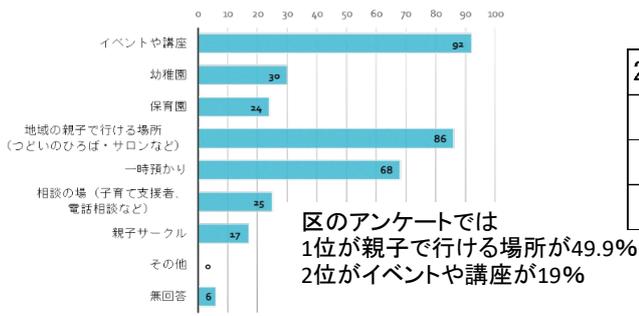
3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・インターネットで情報収集する人がより増えていくため、より多くの情報を正確にまた迅速に提供していく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

子育て情報で何が充実したらいいと思いますか？

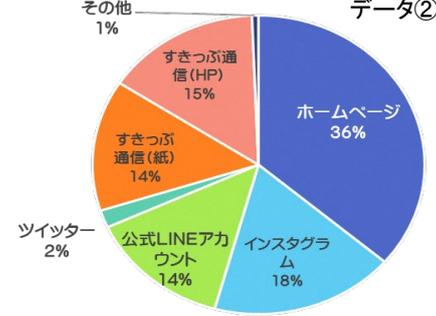


すきっぷ利用者アンケート30年度から

ホームページビュー数
月平均

29年度	30年度	31年度
4,206	4,841	6,212
2年度	3年度	4年度
8,660	8,690	9,360

よく利用している媒体は何ですか？
データ②



利用者アンケート R3年度から

- ・ **すきっぷ通信**: 年12回発行、各回2000部発行、配布箇所: 120ヶ所 (R4年度は1500部、120ヶ所) データ①
- ・ **泉区子育て支援マップ**: 2000部発行、区の転入手続き窓口及びこんにちは赤ちゃん訪問にて配布(R3年度まで)
- ・ **ちょこっとマップ**: R3年度配付開始。拠点から1000部を子育て中の方に配布。(拠点・ひろばにて配布) R4年度からはこんにちは赤ちゃん訪問での配布を開始。また、配布場所もケアプラザや地区センター、子育てサロン等にも拡大。
- ・ **Instagram**: フォロワー数 800名
- ・ **公式LINEアカウント**: 登録者数 380名

1 <子育て支援情報の収集・提供>

- ・ 養育者が必要としている情報(親子で行ける場所やイベント・講座情報等)を紙媒体だけではなくホームページ等に載せることで、すきっぷに来所が困難な養育者にも情報が提供できるようにした。身近に行ける場所として子育てサロンや保育園の地域支援、子育てサークルなどホームページにカテゴリ分けや地域別にして掲載した。また、ホームページを持たない保育園もあるため、園の地域支援の取り組みを発信した。
- ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会(*1)の場で、ホームページに掲載している情報の周知と、イベント等の情報提供を依頼し地域の取り組みについて情報収集を行った。
- ・ 子育て家庭に向けて情報が届くよう、SNSを活用し、Instagramや公式LINEアカウントで情報を発信するようになった。
- ・ 親子の居場所での情報の見せ方について、利用者の目線に立って整理・配置を行い、居場所スタッフが利用者のニーズを汲み取りながら情報を手渡してできるよう、内容の把握や確認を行った。
- ・ こんにちは赤ちゃん訪問員を通して、年間1500部の「泉区子育て支援マップ」を配布した(R3年度まで)
- ・ 居場所の利用方法や制限事項が変更になった際には、ホームページやSNSを通して、わかりやすく掲載し周知した。
- ・ 申込制のイベント情報を、マタニティ用・ひろば用・子サポ用に分けて掲載し、分かりやすくした。
- ・ 居場所に「おしえてコーナー」を作り、養育者が情報を発信し、他の養育者に共有した。コーナーが養育者同士の会話のきっかけとなった。
- ・ 情報発信方法で紙媒体での情報収集率(データ②)が下がっており、ホームページ等から情報を入手する人が増えたことから紙での印刷部数を削減することができた(データ①)

2 <区民への周知>

- ・ 区の協力により、H30年5月より広報よこはま泉区版に「すきっぷのお知らせコーナー」ができ、主だったイベントを掲載できるようになった。これにより、子育て世代以外にもすきっぷの事業周知ができるようになり、事業への申し込みやボランティア確保につながった。
- ・ 薬局、産婦人科医院、相鉄いずみ野線の駅に、拠点のリーフレットやニュースレターを配架した。
- ・ 区民ふれあいまつりに参加し、多世代に向けてすきっぷの周知をした。
- ・ 区が実施した養育者対象アンケートの中で「利用方法や内容がわからない」という回答が多かったため、すきっぷがどんなところかを知ってもらうために、すきっぷの外観やひろば内をGoogleストリートビューを活用して見られるようにした。
- ・ ちょこっとマップが完成したことを「タウンニュース」に掲載し、より多くの区民へ周知ができた(R3.6月)
- ・ 乳幼児健診等で訪れる養育者の目にもふれるよう、泉区福祉保健センター内に拠点の様子がわかる写真を多用したポスター大の案内を掲示した。(再掲・居場所)
- ・ 初めての方向けやマタニティ向け用のすきっぷリーフレットを作成し、相鉄沿線の駅のラックにも置き、周知した。

3 <養育者や担い手の関わり、他機関との協力>

- ・ 居場所に親子サークルのコーナーを設けサークルが情報を掲示できるようにし、利用者がサークルのチラシを持ち帰れるようにした。「泉区のサークル紹介ファイル」を作成し、利用者が閲覧できるようにした。
- ・ 出産した方が「プレママサポーター」となり、体験談やクチコミを記入したものを、マタニティの方が来所した際に閲覧できるようにした。
- ・ 情報担当のスタッフ以外にも、チラシ作成の講座やInstagramの講座などで勉強し、情報の発信に関わった。
- ・ 「情報ボランティア」として利用者から「親子で行けるおすすめの場所」の情報を提供してもらい、掲示して他の利用者とも共有した。
- ・ 他区の拠点と連携し、全18拠点の情報担当者が学びや共有の機会を設定するなど、意見交換の場を立ち上げた。
- ・ Instagramの仕組みを活用して、養育者が知りたい質問やアンケートを行い、ひろばの「おしえてコーナー」に掲示した。普段利用できない養育者にも答えてもらった。(おすすめの公園・幼稚園や保育園情報・おすすめグッズ・地元自慢など)
- ・ 公式LINEアカウントに養育者だけではなく地域の方も登録し、地域の子育て支援の取組を発信することができた。
- ・ ちょこっとマップに泉区の情報を集約したことで、多くの関係機関に活用してもらうことができた。

(*1)エリア別子育て支援ネットワーク連絡会：区を地域ケアプラザエリア6つに分け、地域の支援機関や支援者が互いの活動を理解しながら、地域の特性に応じて子育て支援に取り組むこと目的とする。

(事務局：区・地域ケアプラザ・地区社協・すきっぷ)

評価の理由(区)

- 1 地域子育て支援拠点及び区役所が区民に対し、各々がタイムリーな情報提供ができるよう協力した。取組として、こんにちは赤ちゃん訪問の対象者や転入者向けに「泉区子育て支援マップ」を配布した。令和4年度は新たに発行した「ちょこっとマップ」を配布し、区全域の子育て支援に関する情報提供を行った。
- 2 区役所内で「すきっぷ通信」や利用案内のリーフレットを配架するとともに、子育て支援拠点の活動紹介の掲示をし、利用促進につなげた。
- 3 広報よこはま泉区版でメールマガジンの二次元コードや地域子育て支援拠点が行う各種事業を掲載し、拠点の情報発信に協力した。
- 4 地域の活動団体向けに、地域子育て支援拠点が情報発信の役割を担っていることを周知した。活動団体から寄せられた情報を拠点のホームページや「ちょこっとマップ」等で発信することで、地域情報の提供に力をいれた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ ホームページの充実やSNSの活用により迅速に情報を提供することができた。
- ・ 地域の支援者にもSNS等を活用することで地域情報を発信できることが認識され利用が広がった。
- ・ 泉区子育てガイド「ちょこっとマップ」ができたことで、情報を一元化でき案内がしやすくなった。
- ・ SNS(Instagram・公式LINEアカウント)やホームページなど、様々なツールを使い、拠点のイベントや地域の子育て情報を発信することができた。
- ・ 緊急事態宣言発令に伴う休館期間中に、養育者の声を聞く必要を感じ、Webアンケートを実施し、結果を他の事業に生かすことができた。

(課題)

- ・ 養育者の多様なライフスタイルに応じた情報発信を検討する。
- ・ 拠点の機能や利用方法などを、よりわかりやすく多くの区民に周知していく。
- ・ 子育て関係の情報を集約するため、各施設から情報を集約できるような仕組みが必要である。
- ・ SNS等による発信が必要になり、すべてのスタッフの知識やスキルアップが必要とである。
- ・ 支援者向けの情報を直接伝える仕組みがないので、検討をしていく。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・養育者のライフスタイルが変化し、乳児期から保育所等に入所する子どもが増える中で、地域へどのようにつなげていくか、様々なネットワークを活かして考える。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

	H30	H31(R1)	R2	R3
① エリア別のネットワーク活動(会議、イベント計)	55回	61回	48回	54回
② 公園あそび事業(公園数/回数/参加者数)	11/37回/667人	11/32回/669人	10/21回/598人	11/32回/771人
③ 子育てサロン専門家派遣(回数/利用サロン)	25回/16サロン	24回/15サロン	12回/5サロン	24回/17サロン
④ 子育てサロン連絡会(親子の居場所連絡会)(回数・参加人数)	2回/47人	1回/17人	1回/21人	1回/18人
⑤ つどいの広場・サロン 大型絵本、玩具貸出	46件/10団体	38件/11団体	12件/5団体	30件/16団体
⑥ 泉区子育て応援サポーター(R2開始)(人数)	-	-	10人	17人
⑦ すきっぷを利用して「住んでいる地域を身近に感じようになりましたか？」				
	そう思う	67%	73%	62%
	ややそう思う	33%	27%	30%
	そうは思わない	0%	0%	8%

注③子育てサロン専門家派遣＝栄養士、助産師、歯科衛生士のほか、読み聞かせや人形劇の団体を派遣し、拠点から遠い地域でも相談できる機会を作ったり、サロンの活動を

⑧ 近所の人との交流を積極的に楽しみたいと思いますか？→そう思う56.8% 思わない42.5%(R1~2年度 泉区子育てアン)

1 <地域の子育て支援活動を支えるネットワークを推進>

- ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会(*1)の事務局として、ネットワークの目的を確認しながら地域の子育て支援活動が継続するよう下支えした。外遊び、勉強会、中学生との交流、地域のお祭への参加などを通して、子育て家庭と地域の支援者の接点を作った。(データ①)
- ・ 泉区子育て支援連絡会(*2)の事務局として、関係機関の状況や各エリアネットワークの活動を共有し、区域での子育て支援の理解を深め、各エリア関係機関の活動に活かすための一助となるよう連絡会を運営した。
- ・ 区の協力を得て、主任児童委員の改選後に拠点を会場として研修会を行い、スタッフと交流して相互に活動に対する理解を深めることができた。
- ・ 子育てサロンの担い手を対象とした連絡/研修会(子育てサロン連絡会)を、R3年度より対象を拡大し「親と子のつどいの広場」「地域ケアプラザ」の参加を呼び掛け「親子の居場所連絡会」とした。区内の子育て支援関係者の横のつながりを作ると共に、担い手のニーズを捉えながら研修会を実施した。(データ④)

2 <地域への働きかけ>

- ・ 妊娠期の方を地域で温かく支援する働きかけとして、エリア別子育て支援ネットワーク連絡会を通して関係機関に「赤ちゃんのえき」(*3)への協力を呼びかけ、区内全ての「親と子のつどいの広場」「地域ケアプラザ」及び「社会福祉協議会」の協力を得られた。泉区独自のマークを作成して協力機関の入口に掲示してもらい、拠点の情報発信を通して養育者に周知した。
- ・ 子育てサロンへの専門家派遣では、丁寧にニーズを聞き取りサロンとの関係づくりを行ってきた。コロナ禍での運営について相談に応じ、拠点の消毒やレイアウトの工夫について伝えた。(データ③)
- ・ 「親と子のつどいのひろば」のスタッフに向けて、拠点で行う研修や講演会への参加を呼び掛け共に学んだ。地域資源の一つとしてより深く理解できるよう、相互にスタッフが訪問する機会を作った。
- ・ 公園あそび事業に協力を依頼している担い手と丁寧に振り返りを行い、地域の子育て家庭の姿やニーズを共有した。コロナ禍では外遊びのニーズが高いことを踏まえ、衛生面・安全面に配慮し、地域や担い手の協力を仰ぎながら事業を行うことが出来た。(データ②)
- ・ 区が開催した「子育て支援力向上検討会」(R1、R2年度)から生まれた仕組み「子育て応援サポーター(*4)」の新たな人材の開拓を担い、研修内容を区と共に組み立て、子育て支援に関わる方や、支援に関心の高い方に向けて参加を呼び掛け養成講座を実施した。(データ⑥)
- ・ 「ハマハグ」の周知・推進を行い、地域の店舗や施設に協力を呼びかけ多数の協力を得られた。養育者に向けて、拠点の情報発信ツールを通して周知した。(新規協力店舗開拓 R2=18件 R3=24件)

3 <関係機関や、親の会とのつながり>

- ・ 公園あそび事業にセンター保育園のネットワーク保育士が参加し、外遊びを入口として養育者の相談機会を作ることが出来た。
- ・ シングルの方の「友達が欲しい」というニーズを捉え、「ひとり親サポートよこはま」と事業を共催し、当事者同士がじっくりと交流できるよう託児をつけて、土曜日に拠点とは別の場所で開催した。(再掲 居場所事業3)
- ・ 多胎児家庭のサークルを区・区社協と共に支援し、OBによる当事者向け相談会の運営をサポートした(運営、周知、保育協力)。
- ・ ハッピークローバークラブ(*5)の運営者と話し合い、会員のライフスタイルが変容する中での活動継続について、拠点の関わり・協力について検討した。コロナ禍で、実際に集まることへの不安が高いため、乳幼児をもつ養育者への支援は引き続き課題と捉えている。
- ・ ハッピークローバークラブの協力を得て、小学生の養育者に「入学前の気持ちを話そう」にて先輩ママとして話し手となって貰った。就学前相談を受けた年長児や療育につながっている年中児の養育者を対象に体験を話してもらい、参加者の不安軽減や参加者同士のつながりを作る機会となった。(R3年度:2回実施、R4年度:3回実施)
- ・ 親子向けコンサートを企画し、つくしんぼ会保育部(*6)に相談しながら、子どもが参加しやすい形で聴くことができる「インクルージョンコンサート」を準備した。会場となるテアトルフォンテにも座席の工夫等の協力を得たが、まん延防止等重点措置の延期により観客を入れての開催が出来ず、オンラインにて配信した。
- ・ 拠点から離れたエリアの地域ケアプラザと共催で、養育者からの相談が多い「食」についての講座(離乳食講座・食育講座)を行い、地域ケアプラザの地域コーディネーターと子育て家庭の声を聞きとり、ニーズを共有した。食材や調理には、地域の農家やヘルスメイトの協力を得た。

4 《養育者のライフスタイルの変化をキャッチしながら、地域へつなぐ》

- ・ 子育てサロンの利用者が低月齢化する中、担い手のニーズを受けて研修を実施した。(H30「こどものこころを育てるあそび」、H31「0歳児の遊びと発達について」、R4「サロンで育つ！こどものからだところ ～0・1歳児のあそび」)
- ・ 地域の支援の場を妊娠期から利用しやすくするために、土曜日に「親と子のつどいの広場」にて、マタニティ向け企画(沐浴体験)を行った。(R2年度、3年度 各1回) また、妊娠中の方も参加できることを周知するため、子育てサロンのチラシにマタニティマークを入れる協力を呼びかけた。
- ・ 区で行ったアンケートから、地域との交流に積極的な養育者は半数を超えており(データ⑧)、働き続ける子育て家庭にも地域と繋がりを持てるような支援を検討する必要があることを踏まえ以下の取組を行った。
 - ⇒ 養育者の防災意識も高まっていると捉え、泉区総務課の協力を得て防災講座を実施した際に、近隣の町内会長を招き町内会の活動や防災への取組を紹介してもらった。養育者には町内会への加入方法について説明した。
 - ⇒ エリア別子育てネットワークでは、お祭りへの参加や農家で味の覚狩りなど乳幼児の家庭が来やすい企画づくりを提案し、地域の方々と出会う機会とした。

(※1)エリア別子育て支援ネットワーク:区内を地域ケアプラザごとの5つのエリアに分け、関係機関や地域の担い手が参加して、地域の特性を鑑みながら子育て支援活動を実施し、子育て家庭と地域をつなぐことを目的とする。
 (※2)泉区子育て支援連絡会:区域の関係機関による情報交換と課題の共有を目的とする。参加機関=保育園園長会・幼稚園協会泉支部・地域ケアプラザ・親と子のつどいの広場・基幹相談支援センター・主任児童委員・児童家庭支援センターなど。
 (※3)赤ちゃんのえき:妊娠中の方や子どもを連れての方に、ミルクのお湯の提供やおむつ替えの場を提供する、施設としての協力の形。
 (※4)子育て応援サポーター:「地域の場で養育者の話を傾聴し、寄り添って応援するボランティア活動」。規定の研修への参加が必要。
 (※5)ハッピークローバークラブ:1997年に設立された、泉区とその近郊の「ダウン症児を持つ親の会」
 (※6)つくしんぼ会保育部:1972年に設立された、発達の心配や障がいのある子どもの保護者が運営する地域訓練会の中の、未就学児の会。

評価の理由(区)

1 地域特性を踏まえた子育て支援の充実のため、「エリア別子育て支援ネットワーク連絡会」を実施している。身近な地域で子育て支援をする人と子育て中の人がつながることができるよう、外あそびや季節のイベント等を実施している。区全域を対象とした「泉区子育て支援連絡会連絡会」の目標を参加団体と共有し、エリア別子育て支援ネットワーク連絡会と有機的に連携できるよう再編成した。
 2 区主催で「子育て支援力向上検討会」を実施し、泉区の子育て支援の現状課題や今後の方向性について検討した。検討の結果、令和2年度に地域で子育て支援に携わる新たな人材の発掘・育成を目的に「子育て応援サポーター」の仕組みづくりを行った。(再掲)

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会の活動に、地域の支援者の参加が定着し、より地域性を考慮しながら子育て家庭の姿やニーズを共有し、共に見守り支えていく風土が出来ている。
- ・ 横浜市版子育て世代包括支援センターの考え方にに基づき、区との役割分担を確認しながら、妊娠期から地域の支援に繋げる取組を行い、理解と協力を得ることが出来た。

(課題)

- ・ 妊娠期の家庭に加え、「多胎児を育てる家庭・障がいのあるお子さんとその家庭・外国につながる家庭」といった、多様な家庭を支える取組を地域の様々な担い手や関係機関と共有し、温かく受け入れ支えていけるよう協力して行う。
- ・ 養育者の中で高まりつつあった「地域への関心」が、令和2年はコロナ禍の影響を受けて低下したが、令和3年にはまた少し上向いている(データ⑦)ことを踏まえ、養育者と地域の方々双方のニーズに合った「つながり」を作れるよう、エリア別ネットワークや地域の関係機関との連携の中で取り組んでいく。

振り返りの視点

ア 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。

イ 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

ウ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

エ 養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。

オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧を受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・地域活動の担い手不足に対し、「泉区子育て支援ネットワーク連絡会」の活動や繋がりを活かして、人材の育成について考え取り組んでいく。 ・支援に携わる人材との関係を更に深め、共通する課題に対応する研修や学習の場を提供していく。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

- ① 子育てサロン連絡会(*R4年度からは「親子の居場所連絡会」)・赤ちゃん教室運営協力者の合同研修会
 H30 講演会(こどものこころを育てるあそび) H31 勉強会(0歳児の遊びと発達)(R1年3月の予定=中止)
 R4 講演会(サロンで育つ!こどものからだところ ~0・1歳児のあそび)
 法人開催 勉強会 H30「対人援助の基本と傾聴」 H31「支援者のメンタルヘルス」(2月→中止)
 R3「気持ちに寄り添う 傾聴を学ぶ」=法人スタッフ21名 地域の支援者7名 実習の学生2名
 「パーソナリティ障害について」=法人スタッフ18名 地域の支援者3名
 「コロナ禍とその後のこども・子育て支援」=法人スタッフ20名 地域の支援者5名(オンライン併用)
 子育てサポートシステム スキルアップ研修 R2「気になるお子さんとの関わり方」=提供会員 17名
 養育者向け講演会 H30、H31計=親子227名 支援者参加=28名
 「こどもの食事・偏食について」「イヤイヤ期を乗り切るために」「乳幼児家庭の危機管理」など
 R3 ワークショップ講座「イヤイヤ期を上手につきあうために」=親子15名
- ② 孫育て講座(横浜子育てサポートシステム担当開催) H30=26名 H31=14名(R2年以降はコロナ禍のため開催せず)
- ③ 親子サークルリーダー支援(リーダー研修会 年3回)参加者(親子) H30=44組 H31=52組 R1=29組 R2=11組 R3=52組
 双子サークル・OB支援(ふたごちゃん、あつまれ) H30=親子12組 サークルOB12名 H31=親子12組 OB18名
 R2=中止 R3=親子11組 妊婦1名 OB 5名
- ④ ボランティア活動 すきっぷサポーター親子H30=86組 H31=73組 R2= 組 R3= 組
 すきっぷサポーター背守り・折り紙づくり 地域の方・支援者(のべ) H30=19名 H31=30名 R2=12名 R3=25名
- ⑤ 職場復帰講座(*1)パネリスト H30=4名 H31=4名 R2=4名
- ⑥ 学生ボランティア、研修受け入れ H30=36名 H31=38名 R2中止 R3=13名(大学生、小学生~高校生サマースクール)
 R2 公立看護学校(高校生)にて「地域の子育て支援」について講話
- ⑦ 子育て応援サポーター(*2) R2=10名 R3=17名 /新規研修参加:R3=10名 R4=7名

1 <<支援者に向け、共に学ぶ機会をつくる>>(データ①)
 ・ 地域の担い手のニーズや拠点で捉えた課題に応じて、エリア別子育て支援ネットワーク連絡会の場やサロン連絡会(R3より「親子の居場所連絡会」)で勉強会を開催した。
 ・ 地域の担い手に、拠点で行う養育者向け講演会へ参加を呼び掛け、養育者が抱える課題について共有することが出来た。
 ・ コロナ禍でのニーズを捉え、「親と子のつどいの広場」を対象としてSNS発信講座(4名参加)を実施した。また、「子育てサロンの担い手」を対象としてZoom講座(6名参加)を実施した。

2 <<地域の身近な支援へ、関心ある人をつなぐ>>
 ・ 孫育て講座を横浜子育てサポートシステム担当者が開催し、提供会員や拠点でのボランティア「すきっぷサポーター」につなげた。「広報よこはま泉区版」やチラシの配架により参加者を募り、すきっぷサポーターを子育てサポートシステムの提供会員や、「子育て応援サポーター」(*2)の活動につなげた。(データ②)
 ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会に参加している支援者と地域の親子のニーズを共有し、横浜子育てサポートシステムの提供会員につなげた。
 ・ 「公園あそび」の担い手については、子育て支援に関心がある人・親子サークルを卒業するリーダー等に声掛けをして、担い手の世代を広げた。
 ・ 区が開催した「子育て支援力向上検討会」(R1、R2年度)から生まれた仕組み「子育て応援サポーター」(*2)の新たな募集と研修を担い、子育て支援に関わる方や、支援に関心の高い方に向けて参加を呼び掛けた。(データ⑦)(再掲 ネットワーク)

3 <<養育者の自主的な活動を支える>>(データ③)
 ・ 親子サークルのリーダーに向けて、区・区社協と共に研修会を年3回行い、情報交換会や学びの機会を提供し、支援した。
 ・ コロナ禍で活動に苦慮するサークルリーダーに対して、思いを話し、情報交換する会をオンラインで開催した。
 ・ メンバー募集をサポートするために、拠点のイベントで告知の場を提供したり、拠点のSNSを活用してサークルのPRを行った。
 ・ 多胎児家庭のサークルを区・区社協と共に支援し、OBによる当事者向け相談会の運営をサポートした。(周知、運営、保育協力)(再掲 ネットワーク)
 ・ 居場所を利用する養育者のニーズに応じて、同じテーマを持つ人同士の交流の場としての親子サークル立ち上げを支援した。

様式1-5 地域子育て支援拠点事業評価シート

4 <子育て家庭を見守る地域づくり>(データ②④)

- ・孫育て講座では、孫だけでなく地域の子どもも温かく見守ることで、自分の家族が見守られる安心に繋がることを伝えた。
- ・支援活動の入り口として設けている「すきっぷサポーター」は地域の方が参加して「背守りづくり」を行い、拠点を初めて利用する赤ちゃんに贈っている。メッセージカード同封して交換し、贈り手と受け手が間接的に交流する手段となっている。サポーターが作成する折り紙は居場所を利用する子どもに贈り、親子に喜ばれている。
- ・「すきっぷサポーター」から、子育て応援サポーターとしての活動を始める方もおり、支援活動が広がりを見せた。

5 <次世代育成・養育者への働きかけ>(データ⑤)

- ・5年前前から受け入れている看護学生の研修では、学生の企画による「いのちの授業」を居場所の養育者に向けて行った。
- ・「エリア別子育て支援ネットワーク連絡会」の活動の中で、乳幼児親子と中学生のふれあい体験を実施した。
- ・マタニティの方とその家族向けの事業では、「プレママサポーター」(*3)や居場所を利用している乳児の養育者の協力を得て、居場所で親子と交流する時間を設け、産後の子育てのイメージを持てる機会とした。
- ・養育者を、興味関心があり、得意なことを活かして参加できるボランティア活動へ繋げた。(すきっぷサポーター、プレママサポーター、職場復帰講座(*1)パネリスト)
- ・育休復帰を経験した家庭の先輩パパママから、復帰を控えた家庭に向けて体験を語り、復帰前の家庭の不安を軽減したり、つながり作りとなる機会を設けた。(再掲 相談事業)
- ・ハッピークローバークラブ(*4)の協力を得て、小学生の養育者に「入学前の気持ちを話そう」にて先輩ママとして話し手となって貰った。就学前相談を受けた年長児や療育につながっている年中児の養育者を対象に体験を話してもらい、参加者の不安軽減や参加者同士のつながりを作る機会となった。(R3年度=2回実施、R4年度=3回実施)(再掲 ネットワーク事業)

(*1)職場復帰講座:年1回、区が主催。職場復帰を控えた人が、既に復帰している人に体験談を聞いたり交流する企画。拠点はパネリストを紹介し、当日の運営にも参加している。

(*2)子育て応援サポーター:「地域の場で養育者の話を傾聴し、寄り添って応援するボランティア活動」。規定の研修への参加が必要。

(*3)プレママサポーター:妊娠期の家庭に向けて、乳幼児の養育者が赤ちゃんに触合う機会を提供したり、出産の体験談をノートに書くなどするボランティア。

(*4)ハッピークローバークラブ:1997年に設立された、泉区とその近郊の「ダウン症児を持つ親の会」

評価の理由(区)

- 1 子育て支援を担う方が活動を継続できるよう、親子の居場所連絡会(旧子育てサロン連絡会)や親子サークルリーダー研修会を子育て支援拠点とともに実施した。
- 2 子育て世代が地域の子育て支援の活動に関心を持ち、将来的に地域活動に携わる人材となるよう、エリア別子育て支援ネットワーク連絡会での公園遊び等の活動やイベントを子育て世代と協力して行った。
- 3 区主催で「子育て支援力向上検討会」を実施し、泉区の子育て支援の現状課題や今後の方向性について検討した。検討の結果、令和2年度に地域で子育て支援に携わる新たな人材の発掘・育成を目的に「子育て応援サポーター」の仕組みづくりを行った。(再掲)

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・拠点で行うボランティア活動「すきっぷサポーター(背守りづくり、折り紙づくり、読み聞かせ等)」をきっかけに、参加者同士の交流が生まれ、更に、「子育て応援サポーター」や「子育てサポートシステムの提供会員(預かりを行う会員)」につながる方もおり、地域での支援活動への入口となった。
- ・コロナ禍でも活動が継続し、活動を養育者に周知できるよう、SNSやオンライン会議(Zoom等)といった新しいツールを取り入れるための研修やサポートを行った。
- ・R2年度より区が開始した「子育て応援サポーター」の新規人材を募集し、区と協働で研修育成を行い、地域の支援の場での活動に繋げ、支援のネットワークを広げることが出来た。
- ・妊婦と養育者の接点が増える中で、養育者が体験を伝えたり、育休復帰した養育者が復帰を控える養育者に向けて体験を伝える機会を作り、「伝えることで支える」循環が生まれた。

(課題)

- ・「子育て応援サポーター」や「子育てサポートシステムの提供・両方会員(預かる会員)」を広く区民に周知し、子育て支援に関心を持つ人の活動の入口としていく必要がある。
- ・時代に応じて変化する養育者のライフスタイルに対応して支援できるよう、地域の担い手や関係機関と共に学んだり、変化を伝えて共に考える機会を作る。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- イ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- ウ 新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- エ 活動希望を丁寧を受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- オ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- カ 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
- キ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- ク 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ケ これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・利用会員の依頼が多い地域と少ない地域があるため、提供会員の活動状況に偏りが生じている。活動の少ない提供会員が活動に繋がる工夫を検討していく。 ・早朝・深夜の預かり、配慮が必要な依頼が増加傾向にあり、提供会員の負担が増加している。	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

	29年度	30年度	31年度	R2年度	R3年度	
①活動報告件数	1663	1297	1346	691	1158	
②コーディネート数	81	87	115	82	119	
③新規会員数	利用会員	73	102	131	86	108
	両方会員	9	5	6	2	1
	提供会員	17	12	21	10	10
	合計	99	119	158	98	119
④居場所預かり数	29	25	54	31	38	
⑤利用者実数	76	79	90	61	89	
	提供者実数	46	47	53	47	57

1 <<横浜子育てサポートシステムの区民への周知>>

- ・ 区の協力により、広報よこはま泉区版に横浜子育てサポートシステムの説明を掲載した、提供会員募集のチラシを自治会の回覧板で周知することができ、提供会員が増加した。(データ③) 集団入会説明会を月2回行っているが、提供会員が少ない地域にはさらに出張して説明会を行った。また、小中学校にチラシを13,000部配布した。
- ・ 4か月児健康診査・両親教室に向き、どのような利用できるかを簡単に説明した。
- ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会のお祭り等に担当者が出向く際には、チラシを配布した。
- ・ 保育園送迎依頼が多く保育園の園長会で事業の説明や協力依頼をしており園長にも理解が進んでいる。
- ・ 居場所スタッフが、新規登録の際のやり取りの中から、ニーズに応じて担当のスタッフに繋ぐことにより、新規の利用会員数が増えている(データ③)
- ・ 小学生低学年のニーズが増えている。小学校の生活をイメージができていない保護者向けにチラシを作成し事業をPRする。(R4年度計画)

2 <<事業の利用しやすさ>>

- ・ 活動件数(データ①)減っているが、コーディネート数(データ②)は増えている。習い事への送迎や小学校の朝のサポートが増え、他のサービスでは支援できない部分を補っている。
- ・ 実際に利用している利用者は年々増加し、それに伴い、なるべく多くの提供者の方にサポートをしていただくようコーディネートしているため微増ではあるが多くの提供会員の方に協力をし活動していただけている。(データ⑤)
- ・ 定期的な説明会に加えて地域に出向き、地域での説明会を行った。コロナ禍のため、個別での対応を希望する方には個別で対応した。また体調が悪く、拠点に来られない養育者には訪問して入会説明会を行った。
- ・ 普段外出しづらい双子サークルのために出張して、入会説明会を行った。
- ・ 居場所預かりを行うことで、預かりの様子などを見ることが出来るため、他のスタッフがいる安心感と慣れている拠点で預かりを行うことで利用につながり、人数が増えた。(データ④)
- ・ 入会説明会の時に、リフレッシュで利用できることや養育者が在宅でも利用できることなどを事例としてあげ、多様なニーズに応えられることをPRした。
- ・ コロナ禍の影響により来館しづらい状況が続いたため、オンライン(ZOOM)で入会説明会を行なった。

3 <<継続できるように支える>>

- ・ 登録したばかりの提供会員や定期的なサポートのない会員には、入会説明会の見守り託児をお願いし今後の活動に繋げた。
- ・ コーディネートする際には利用会員から丁寧に聞き取り、事前打合せには同席し、活動内容を確認しあい、スムーズに活動できるようにフォローした。また、提出された活動報告書の内容をもとに提供会員、利用会員に連絡を取り活動のフォローをした。
- ・ 一人での活動になるため、実際のサポート中に迷うこともあり、提供会員から丁寧に話を聞いている。対応に迷う事例を取り上げ、臨床心理士の先生を講師に研修を行い、今後のサポートに役立ててもらうことができた。
- ・ 提供会員交流会のあとに茶話会を行い、近況など話し合う時間を設け、サポート共有や最近の区の現状を共有した。
- ・ 就労家庭が増加傾向にあるため、保育園・小学校の送迎や習い事の送迎が増えていて、朝早くや遅い時間のサポートが増えている。特定の提供会員に負担が偏らないよう、複数人の提供会員とコーディネートするよう心がけた。

4 《養育者のニーズに合った支援》

- ・ コーディネートを進めるにあたり、様々な選択肢の中から、養育者のニーズに応えつつ子どもにとってより良い対応について、利用者支援事業と連携を図り検討しながら情報提供を行った。
- ・ サポートの依頼が来たことを通して、孤立した親子や支援の必要な親子に対しコーディネートを行いながら適切に関係機関との繋がりを作ることが出来た。
- ・ 公的なサービスを希望しない方の援助にあたっては、スタッフが信頼関係を築きながらサポートをした。
- ・ 日本語を全く話せない外国につながる家族からサポート依頼があり、横浜市多文化共生総合相談センターの協力を得て、英語の通訳を介して入会説明を行った。提供会員は英会話のできる夫がいる方をお願いした。
- ・ 利用会員からの依頼時にていねいな聞き取りを行い、必要に応じて保育園の一時預かりや子育てタクシーといった、子育てサポートシステム以外にも利用会員のニーズに合った情報を提供した。
- ・ 就労家庭が増加傾向にあるため、保育園・小学校の送迎や習い事の送迎が増えていて、朝早くや遅い時間のサポートが増えている。特定の提供会員に負担が偏らないよう、複数人の提供会員とコーディネートするよう心がけた。(再掲)

評価の理由(区)

- 1 事業案内と提供会員の募集について広報よこはま区版の特集、小中学校長会を通じて保護者へのチラシ配布、自治会町内会への回覧を行った。
- 2 乳幼児健康診査や来所面接、個別相談、母子健康手帳交付時等で必要のある方に事業紹介をするとともに、拠点と直接調整し利用につなげている。
- 3 定例会の中で、会員向けの研修会や交流会の情報を共有している。また、拠点と協議の上、予定者研修の講師の調整を行った。
- 4 拠点との情報提供を行う中で、必要に応じて助言を行っている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ 自治会の回覧は効果があり、提供会員増加につなげることができた。
- ・ 実際に依頼している利用会員や活動している提供会員が増えている。
- ・ 事前打合せだけでなく、活動が始まってからもコーディネーターに相談しやすい雰囲気を作り、丁寧にサポートの状況を聞くことにより、両会員が気持ちよく利用できるようフォローを行った。
- ・ 日本語の全く話せない家族からの依頼にYOKEなどを活用し、サポートに繋がられた。
- ・ コロナ禍だが、提供会員には普段から丁寧な聞き取りを行い、無理ない範囲での活動のお願いをしながら継続していただき、多くの提供会員に活動してもらうことができた。
- ・ 難しいサポート依頼に対しては、いろいろな手立てや方法を提示したうえで養育者に選択してもらい、サポートが成立するようになった。

(課題)

- ・ エリア別子育て支援ネットワーク連絡会や、子育てサロンとのつながりの中で、その地域のサポートの状況を伝え、提供会員増加につながるような活動を継続していく。
- ・ 利用会員を適切な支援につなげるため、丁寧なニーズ把握に努めていく必要があり、コーディネーターも支援先の情報収集や共有も必要である。
- ・ 提供会員・両方会員数の拡大に向けて、新たな発掘が必要である。コロナ禍のため、サロン訪問などもできなかった。地域の場に出向いてPRする必要がある。
- ・ 本部機能が市への移管に伴い、区支部同士の連携が活発になり、区境支援も増えているため、近隣区との情報共有を活発に行った。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができていないか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
- カ 提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
- キ 会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ク 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
- ケ 会員間で授受される個人情報や会員が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
- コ 援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- サ 専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
- シ 子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができていないか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・利用者支援事業という子育ての相談ができる機能が拠点にあることを、広く区民に周知する。 ・関係機関や地域の担い手と顔の見える関係は築けている。今後は横浜子育てパートナーの役割や利用者支援事業について、より理解を得ながら連携して支援できることを目指す。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

①認知度・利用の詳細(拠点アンケートより)

	知ってる	専用電話	匿名可	予約可
平均(H30~R2)	64.3%	52.0%	30.0%	41.3%
令和3年度	75.0%	49.0%	70.0%	44.0%

○相談(H30→R3)変化と分析

相談方法	相談のきっかけ		対象者
出張	地域活動	広報チラシ	小学生
0.9%→10.6%	1.4%→9.1%	3.1%→5.1%	1.9%→7.0%

※子育てパートナーの認知度だけでなく、課題であった相談の仕組みや方法の認知度は過去平均よりも最新結果はポイントが上がっている。

○包括・関係機関との連携・多様な親子への支援

- ・マタニティ見学会(沐浴体験 粉ミルク作り 妊婦体験)のべ198名
- ・母子保健コーディネーターとの定例カンファレンス
- ・共遊ひろば・双子三つ子交流会(オンライン)
- ・入学前の話・ダウン症児の会

○連携先施設・事業

- ・子育て支援者・赤ちゃん教室・子育てサロン・親子のつどいの広場
- ・杜の郷こども家庭支援センター・多胎児サークル・ダウン症児の親の会
- ・泉区基幹相談支援センターかがやき・旭区地域活動ホーム(連)おもちゃ館
- ・他区子育てパートナー・ひとり親サポートよこはま等

【相談方法】出張の割合が10倍に増加。アウトリーチを目標にしたが、コロナ禍になり、なかなか思うように訪問できなかった。赤ちゃん教室・地域のサロンには相談方法出向くことができ、周知と相談対応を行った結果である。

【相談のきっかけ】地域活動と広報チラシが年々上昇した。課題であった広く周知することに区とともに取り組んだ結果が表れていると考える。

【対象者】相談の内容は変化しているが、数年間継続して対応している相談者が数名いる。小学校入学後も来館や電話での相談に対応している。

1 <事業周知及び区民への認知>

- ・他の事業の参加者や従事者へ利用者支援事業の周知を行った。(子育て支援者相談会場・赤ちゃん教室・子育てサロン・つどいの広場・区民まつり・エリア別子育て支援ネットワーク・拠点他事業等)
- ・母子手帳交付時に母子保健コーディネーターが配布する「マイカレンダー」に、拠点マタニティ向け事業の案内や、相談ができることを知らせる案内を載せた。さらに、母子手帳交付時に配布することの効果を検証し、新たに、拠点の事業内容がわかりやすく、親しみやすくなるリーフレットを作成し、区を通してマタニティの方に配布をした。
- ・拠点利用者の横浜子育てパートナーの認知度は著しく上がっている。また、課題であった相談の仕組みや相談方法についても、周知ができた。(主なデータ①)
- ・コロナ禍に気持ちを話せる場を設け、コロナによる子育て中の家庭の現状やニーズを知ることができた。把握したニーズから次の支援へと繋げた。

2 <相談者に寄り添い、主体性を尊重した個別相談と適切な支援窓口等の案内や仲介>

- ・保健師・助産師・母子保健コーディネーターや拠点スタッフとは、利用者に提供する情報を共有し、相談者自身が選択できるよう配慮した。利用者の主体性と選択を尊重し、役割を確認しながら連携し継続的に見守った。
- ・居場所のスタッフとの間で日々情報の確認を行い、相談先の提案や、相談者の了解のもと、紹介・仲介をし、相談者に寄り添った支援を心掛けた。
- ・保健師等区の職員や専門家などのカンファレンスやスーパーバイズ、拠点スタッフとの振り返りを行い、様々な立場の意見を聞くことで多角的な視点を持って支援することを意識した。
- ・相談対応においては、現状に至った経緯や背景も考慮し、相談者を支援するために必要な方法を考えるよう努めた。
- ・妊娠期に参加できる事業を開催し、参加者が相談しやすい仕組み作りと、妊娠期からの拠点利用を促した。(沐浴体験・粉ミルク作り・妊婦体験等)
- ・養育者による相談や区とのカンファレンスから把握した共通の悩みやニーズに対して、「若年で出産した母親の会」や「共遊ひろば(※1)」を開催し、また、区からのアドバイスをもとに、子どもの遊びの場、親同士交流し共有や相談し合える場を提供した。居場所のスタッフとも連携し、拠点の利用へと繋げた。
- ・特別支援教育を受ける予定の年長児の小学校入学に際し、親の不安な気持ちを先輩ママや拠点スタッフに話ができる機会として、「入学前の気持ちを話しませんか」(※2)を実施した。また、年中児を対象にした会では、年長になってからの相談の流れなど見通しを立てる機会とした。
- ・検索で電話相談が受けられることを知り、匿名でも受けられることから複数の定期的な相談に対応した。
- ・双子を連れて外出が難しく、特にコロナ禍でつながらぬ機会がない養育者同士をオンラインで繋げ、相談・情報交換・交流の機会を創った。

3 《ネットワークの構築と協働の関係作り》

- ・ 保健師や助産師、母子保健コーディネーターに事業の開催に向けてアドバイスや協力をお願い、実施後も引き続きお互いに情報共有し、協働の関係作りを行った。(沐浴体験等妊娠期の事業・共遊ひろば・双子ちゃん集まれ等)
- ・ 地域の子育てサロンへの研修内容の検討を泉区こども家庭支援課・区社会福祉協議会と行った。子育てサロン連絡会・研修会は、親と子のつどいの広場、地域ケアプラザにも声をかけ、名称を「親子の居場所連絡会」に改編し、区内の子育て支援関係者の横のつながりを作ると共に、顔の見える関係作りを図った。ニーズを把握した上で研修会の講師を保育園地域支援保育士に依頼し、課題解決と地域との関係作りを行い、地域での子育て支援のさらなる充実を図った。
- ・ 横浜子育てパートナーはエリア別子育て支援ネットワークの担当エリアを数年おきに交代し、広く関係作りを行っている。また、担当以外のエリアでも全体の会議やイベントには継続して参加し、横浜子育てパートナーの周知をしている。
- ・ 地域ケアプラザに出向き講座を開催したり、親と子のつどいの広場に向けて共催事業の提案を行うなど、地域に出向いた支援と関係作りに努めた。
- ・ 小学校入学後も継続している個別の相談に対応するために、支援の方法について地域の関係機関等と検討を重ねた。
- ・ 子育て応援サポーターの養成講座やフォローアップ研修に、区と拠点と一緒に取り組んだ。

※1「共遊ひろば」:低出生体重児や発育発達がゆっくりな子に遊びの場を提供し、親同士も交流できるように拠点スタッフがサポートしている。事業の会場は泉区社会福祉協議会多目的室を優先予約枠で利用。

※2「入学前の気持ちを話しませんか」:コロナ感染拡大防止の影響で、療育センターでの説明会が以前の内容と変わったことを聞き、拠点の相談からも不安に感じる親の姿を把握し、区内ダウン症児の親の会(ハッピークローバークラブ)の協力を得て、気持ちを話し・経験を聞くことができ、傾聴してもらえるピアサポートの場を提供した。療育センターに通っていない親子に対しても同様に情報共有の場となった。

評価の理由(区)

- 1 広報よこはま泉区版への掲載、こんにちは赤ちゃん訪問員・子育て支援者・主任児童委員の定例会、赤ちゃん教室など様々な機会を捉え広く区民への周知を行った。
- 2 相談業務の支援としては定例会や必要時に相談状況・内容の報告を受け、横浜子育てパートナーが適切な支援を行えるように助言するとともに必要に応じ連携しながら支援を行った。
- 3 横浜子育てパートナーが地域の保育園や子育て支援者、主任児童委員などの地域の社会資源と円滑な連携が図れるような連絡調整を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ 多様化する相談内容に対応するため、拠点職員も共に研修やスーパーバイズを受け、専門性と気軽な相談のバランスを取り実施した。
- ・ 区の事業に参加し、得た内容を拠点事業に活かすとともに、参加者に横浜子育てパートナーの周知をした。
- ・ 子どもの成長に合わせて、その時々のお悩みやニーズに対応することを意識しながら相談対応することができた。
- ・ 地域で活動している支援関係者が抱える課題を把握し、解決のために関係機関等と協議した。地域における子育て支援が充実するよう、子育てサロンや親と子のつどいの広場への事業を展開した。
- ・ 拠点への来所が難しい方に向け、オンラインの事業や交流会を開催した。

(課題)

- ・ 居場所での相談に対して、地域資源を十分に知り、より良い対応ができるよう、スタッフ全体で地域の支援への理解を深めるために、パートナーの持つ情報を共有する。
- ・ 2020年以降はコロナ禍で思うようにアウトリーチ(情報提供や出張相談)ができなかった。このような状況においても、利用者支援事業と地域の支援が実際に訪問する以外のつながり合う方法も検討しながら、よりよい関係づくりを図っていく。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介・支援依頼等について、相談者が円滑に利用できるような対応をしているか。
また、専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に紹介・仲介する等、適切な対応を行っているか。
- カ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら継続的な関わりをもっているか。
- キ 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。
- ク 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。